

広島女学院を 創立した人たち

創立協力者 ランバス宣教師父子

創立者 砂本貞吉

広島女学院

広島女学院を創立した人たち



広島女学院

広島女学院を 創立した人たち

創立協力者 ランバス宣教師父子

創立者 砂本貞吉

広島女学院

はじめに

私立学校の多くは、高志、即ち建学の精神を掲げて創められました。授業料、補助金や志を同じくする者の寄付金等によつて維持され、営々と続き伝統を築いてきました。藩校として始められた教育機関が官学・公立なら、松下村塾のような個人の創めた塾もまた有為の人材を育てた教育機関であり、公立に対し私学と並び称されてきました。

しかし、私学はそれぞれの伝統に反してその草創期に光が当てられることは少なく、脚光・注目ほとんど現代になってからでした。まして創始者などの源流への関心は薄れてしまいがちで、私たちの広島女学院と同じではないかと案じておりました。実は本学の学長・今田寛先生はそのことに着目し、すでに思いをめぐらせておられることを知りました。

私は、一昨年秋に院長に選任、理事会において理事長に互選され、昨年春就任しました。十月には久しく開かれていなかった全学院教職員研修会を予定しておりましたので、短期間で不十分ではありましたが、改めて学院の原点・真髓を理解しておく必要から、歴史を紐解き、研修会用資料として「私たちのゲーンズ先生」と題してその歩みをまとめました。昨年は丁度校母ゲーンズ先生が来任されて百二十年の記念すべき年にあたり、「校母・ゲーンズ先生」に焦点を当てたいとの思いもありました。

これまでの充実した諸資料から、それほど確かめなくても書き出すことの出来る「ゲーンズ先生」を歴史の出発点として、そこに到るまでの源流に位置される「創立者」「創立協力者」については、挿話的に著すにとどめました。砂本貞吉先生、ランバス博士父子が源を起こされ、その招聘に応えてゲーンズ先生が来任されたことを前に、研修会に間に合わせるために急いで筆を進めました。

ご存知の方も多いことと存じますが、広島女学院も関西学院も共に、今から百二十年余も前にランバス博士父子を創立協力者・創始者としてその源流を同じくする、ある意味で姉妹校の關係にあります。今田寛先生は、幼稚園から大学院までを全て関西学院に学ばれました。ご父君は教職者（牧師）、高名な心理学者でもあり、関西学院の院長も務められました。このような訳でランバス博士父子についての史料は事欠かないと思われますが、砂本貞吉先生の検証は大変なことではなかったかと拝察いたします。先生から提示された原稿は、学識豊かな学術研究論文と敬服しますとともに、多様な読者にとっても読み易さを配慮されていることに感服致しました。

ここに史実としての広島女学院の源流を公に示す書物を皆様にご紹介できますことは、この上もなく光栄であり、誇りに思っております。本書は今田寛先生にして初めて可能でありましたことを思い、広島女学院大学長、大学基準協会他多くの公職に加えて、心理学者としてのご研究等でお忙しい中に、広島女学院のために、刊行くださいましたことに対して、心から感謝申し上げます。

なお、本書により、昨秋刊行しました「私たちのゲーンズ先生　そして広島女学院」が完成したものとなり、その何れも広島女学院維持会からのご支援によりますことを感謝し特記させていただきます。

二〇〇八年一月三十日

学校法人　広島女学院

理事長　黒瀬　真一郎
院長

目次

第一章 広島女学院創立協力者・ランバス宣教師父子

今田 寛

南メソジスト監督教会の日本宣教	2
ランバス宣教師父子とその家系	3
ランバス宣教師父子の日本伝道とマケドニア・コール	5
広島女学院・広島流川教会の誕生とゲーンズの着任	8
ランバス宣教師父子のその後	12
ランバス宣教師父子の瀬戸内に残した足跡	16
ランバス宣教師父子の生涯を振り返って思うこと	19
広島女学院とランバス宣教師父子	19
真のグローバリズムの具現者ランバス宣教師父子	20
「本物」について考える	21

補足	メソジストという教派について	24
----	----------------	----

第二章 広島女学院創立者・砂本貞吉

今田 寛

年 表	34
砂本貞吉の生涯	36
第一期日本時代（一八五六～一八八二）〇～二十六歳	37
第一期アメリカ時代（一八八二～一八八六）二十六～三十歳	37
第二期日本時代（一八八六～一八九二）三十～三十五歳	38
第二期アメリカ時代（一八九一～一八九四）三十五～三十八歳	41
第三期日本時代（一八九四～一九三八）三十八～八十一歳	42
M.E.C.S.の日本宣教の中での砂本貞吉の位置づけ	43
広島女学院の歴史の中での砂本貞吉の位置づけ	46

市井の伝道者・砂本貞吉夫妻	49
砂本ゆかりの二つの教会について	51
下関丸山教会・ランバス記念会堂	51
ハリス合同メソジスト教会	53
補足 謎解き	54

第一章

広島女学院創立協力者・ランバス宣教師父子

今田 寛

二〇〇七年春、広島流川教会から W. R. ランバス（若ランバス）のレリーフ（写真1）が広島女学院大学に寄贈されました。それを機に、同五月二十九日のキリスト教の時間にランバス宣教師父子のことについて学生たちに話す機会がありました。また十月一日の女学院創立記念日に行われた全学教職員研修会でもランバスについて話すように求められました。ランバス父子は本学の創立協力者と呼ばれていますが、本学では校母と慕われる



写真1

W. R. ランバス
（若ランバス）
（寄贈：広島流川教会、
2007年5月）

る N. B. ゲーンズの名の影にかくれて、ほとんど話題になることはありません。したがってランバス宣教師父子を紹介するよい機会でした。本稿はこれらの話をもとにまとめたものです。そもそも学生に向けて話した事が始まりですので、少し解説的過ぎる部分があると思います。また本稿を起こすにあたって、広島以外の読者も多少意識しましたので、広島を知る者には土地

の記述がくどいかも知れません。これらの点はお許しください。

南メソジスト監督教会の日本宣教

ランバス宣教師父子は、アメリカの南メソジスト監督教会の宣教師ですが、同教会が日本宣教を開始するに至るまでの背景をまず簡単に振り返っておくことにします。日本にキリスト教が伝来したのは一五四九年、フランシスコ・ザビエルが来日した時といわれていますので、もう四五〇年以上も前のことです。しかし江戸幕府（一六〇三―一八六七）は鎖国政策をとつたので、その後長らくキリスト教の伝道は途絶えることになります。そして明治の始まる少し前、一八五三年にいわゆる黒船がやってきて日本は開国を余儀なくされ、アメリカとの通商条約が締結された一八五八年の翌年（明治が始まる九年前）、再びキリスト教が日本に伝えられることになります。先のザビエルはカトリック（旧教）の神父でしたが、今度は本学が属する宗派、プロテスタント（新教）キリスト教の宣教師が六人来日しました。まだキリスト教の布教が禁じられていた時のことです。実はプロテスタントキリスト教会にはいくつかの教派があつて、その時に宣教師を送ってきたのはそのうちの三教派でした。しかしその中には本学が属していたメソジストという教派は含まれていませんでした。

それではメソジスト教会が日本宣教を始めたのはいつだったのでしょうか。それは「切支丹禁制の高札」が撤去された一八七三年（明治六年）のことでした。では広島女学院はその流れの中から生まれたのでしょうか。実は

そうでもありません。一八七三年に宣教師を日本に送つて来たのは、合衆国北部に本部をもつメソジスト監督教会とカナダメソジスト教会でした（注1）。しかし本学の創立協力者のランバスが属していたのは、メソジスト教会の中でもアメリカ南部に本部をもつ南メソジスト監督教会（Methodist Episcopal Church, South 以下MECSと略す）でした。同教会は黒人問題なども絡んで、一八四五年に北部のメソジスト監督教会（MEC）とは分裂し、その後の南北戦争（一八六一―一八六五）や、結果としての南軍の敗北による経済的疲弊その他の理由もあって、日本宣教を決定したのはようやく一八八五年（明治十八年）になってからのことでした。これは、この年の終わりまでにわが国に設立されていたキリスト教系の学校が少なくとも四十四校もあったことを思うと（注2）、非常に遅いスタートといわざるを得ません。そこでMECSの本部は、当時中国伝道に従事していた宣教師たちを日本に派遣することになり、それが老ランバス、若ランバス、デュークス宣教師の三人でした。その時、老ランバスは五十六歳、若ランバスは三十二歳でしたが、日本宣教の総責任者（総理、Superintendent）には若ランバスが任命されました。

ランバス宣教師父子とその家系

父J. W. ランバス（James William Lambuth, 1830-1892）は、明治に先立つこと十四年、二十四歳の若さで一八五四年中国への伝道を開始し、日本に移るまでの三十二年間、中国伝道に献身したMECS所属の宣教師で

した。したがってその長男である若ランバス (Walter Russell Lambuth, 1854-1921) は上海で生まれています。若ランバスも父親のあとを継いでキリスト教の伝道者の道に進みますが、同時に医学も学び、日本に移るまで、一年半のアメリカ、イギリスでの医学研究の期間を含めて、九年間中国で医療伝道に携わり、蘇州や北京に病院を建設しています。このようにウォルターは二代目の宣教師ですが、実は老ランバスの先代も先々代もアメリカ先住民や罪人に宣教活動をした宣教師だったので、正しくはウォルターは四代目宣教師ということになります。

この四代にわたって家族の中で宣教師精神が連綿と受け継がれた姿を見ると、今日私たちが失いつつある家族の絆・家族愛の強さを感じないわけにはいきません。最近話題の書物『国家の品格』の中で、藤原正彦さんは四種類の愛(家族愛、郷土愛、祖国愛、人類愛)を挙げていますが、その中で基本となるのは家族愛であって、この愛の土台がないと他のどのような愛も生まれえないという意味のことを言っていますが、その通りだと思います。ランバス家の強い家族愛と強い信仰があったからこそ、人種を超え、国境を超えて人類に奉仕する精神が四代にもわたって家族の中で引き継がれたのだと思います。家族の絆が弱くなり、昔は見えていたものが見えなくなっている今日の私たちの現在の社会の姿を見ると、世の中の進歩とは一体何なのだろうかと思う時があ



写真2

J.W.ランバス
(老ランバス)

ります。

ランバス宣教師父子の日本伝道とマケドニア・コール

このようにして日本伝道を決定したMECSですが、日本宣教の第一陣として老ランバス夫妻とデュークスが神戸に着いたのは一八八六年（明治十九年）七月二十五日のことでした。そして若ランバス夫妻は同年の十一月二十四日にやや遅れて着任することになります。しかし広島女学院が誕生するためには、本学の創立者といわれる砂本貞吉とランバスとの出会いがなければなりません。そこで砂本について少し述べることにします。なお砂本の写真は後の写真5と第二章を見てください。

砂本貞吉（一八五六～一九三八）は広島已斐の出身ですが、一八八二年（明治十五年）に船乗りになるための航海術を学ぶためにアメリカ経由でロンドンに向います（注3）。しかし途中サンフランシスコでキリスト教に出会い、神学を学び、メソジストの牧師O. ギブソンから洗礼を受け、伝道者となつて、四年後の一八八六年に広島に残してきた母親をキリスト教に導くために帰国します。そして横浜から広島へ向かう途中、九月に神戸に老ランバスを訪ね、伝道のために是非広島に来てほしいと強く願い出ます。

老ランバスはこの砂本の来訪を非常に喜びます。一つの理由は、まだ来日二ヶ月で日本語も不自由なときに、英語を話すクリスチャン日本人に会えたことです。第二のより大きな理由は、まだどの方面にどのように伝道

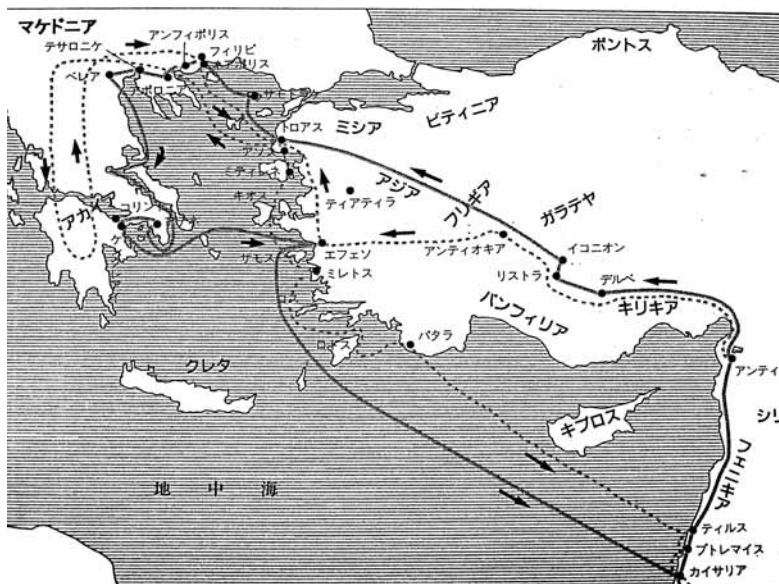


図 1

パウロの伝道旅行

マケドニアは図の左上、ギリシャ北部の地域
 (日本聖書教会『聖書 スタディ版』新共同訳、
 2006、付録に基づき加筆)

を始めてよいのか決めかねていた時に、広島への伝道の誘いを受けたからです。老ランバスはこの誘いを聞いたとき、これぞ神様からの呼びかけだと思い、それがきっかけになってMECSのその後の「瀬戸内圏伝道構想」が誕生することになるのです。

使徒言行録十六章六節から十節にはマケドニア人・コール（マケドニア人の招き）として知られている記述があります。実は老ランバスが砂本の広島への誘いを受けたときに、パウロの伝道旅行のことを記した聖書のこの箇所を思い出したのです。少し解説しますと、パウロはキリストの直接の弟子ではありませんし、むしろキリスト教徒を迫害した人ですが、後に回心して初期

キリスト教界の最大の伝道者といわれるようになった人物です。そして新約聖書にも多くの書簡を残しています。本書のスクールモットーの「我らは神と共に働く者なり」という聖句の出ている「コリントの信徒への手紙 一」もパウロの書簡の一つです。実はパウロは生涯に三度の大きな伝道旅行を行っているのですが、この聖書の箇所は彼の第二回目の伝道旅行のことについて書かれたところです（図1太線参照）。パウロは今のトルコ、小アジアを西に向かつて旅を続け、ガラテア、フリギアを通ってビティニア地方に行こうとするのですが、イエスの霊がそれを許さないで、ミシア地方を通ってトロアスというエーゲ海沿いの町に泊まります。その夜マケドニア人が幻に現れて、是非マケドニアに来てわれわれを助けてくれという招きを聞きます。それを聞いたパウロは、エーゲ海を渡りギリシャの北部のマケドニア地方に向かうのですが、これはキリスト教の歴史の中では大きな意味を持っています。つまりキリスト教がアジア圏を初めて離れてギリシャ・ローマ文化圏に入り、ひいてはヨーロッパ全域、全世界に広がる契機になったからです。したがってこのマケドニア人の幻を通しての神様のパウロへの呼びかけのことは、後にマケドニア・コールといわれるようになったのです。

老ランバスが砂本の広島伝道への誘いを聞いたとき、彼はこれぞマケドニア・コールだと思います。つまりこれを、砂本を通しての神様からの呼びかけと信じ、広島を拠点にした瀬戸内伝道活動を決心したのです。別の言い方をしますと、砂本の老ランバスの訪問は、MECSの日本における伝道活動の方向を大きく決定したことになります。

広島女学院・広島流川教会の誕生とゲーンズの着任

神戸のランバスに別れを告げて一足先に広島に帰った砂本は、約二週間して老ランバスに連絡をとります。その時のことを老ランバスは次のように書いています。「十月の初旬、広島 of 砂本から、キリスト教に深い関心を抱く人たちを導くために広島を訪問するようにとの強い招きを二、三度受け取った」（一八八九年十二月三十一日の四季会（注4）記録より）。そこで老ランバスは鈴木愿太と共に一八八六年十月二十日に神戸を發ち、岡山までは陸路、そこからは海路で広島・宇品港に着き、十月二十五日、鳥屋町野口旅館で最初の小さな集会をもちます（図2、0参照）。その後、ランバスと砂本は聖書研究と英語教育のための小さな私塾「広島女学会」を西大工町（現 榎町、図2、1参照）に開きますが、これが広島女学院の誕生となります。さらに後、薬研堀にあつた杉江タツの家塾と、石見屋町にあつた木原適處の塾「広島英学校」の女子部を合併して一つの女学校にし、文部省に認可された女学校として「私立広島英和女学校」が翌年二月十日に砂本を校主として正式にスタートします。そして場所も鉄砲屋町（現 堀川町、三越のあたり、図2、2参照）に移り、生徒募集を開始します。しかしそこには一ヶ月しか留まらないで、三月八日には場所を細工町西蓮寺前（現 大手町一丁目、原爆ドームの南東の隣接地、図2、3参照）に移します。当時の記述によりますと「文武館と云つて二階で法律を教え、下では剣道や柔道を教えて居た建物が空いたので、それを借りて二階を女学校・・・とし、下を教会・・・とした」（『広島女学院百年史』、p.7）とあります。そしてこの教会が現在の広島流川教会となります。

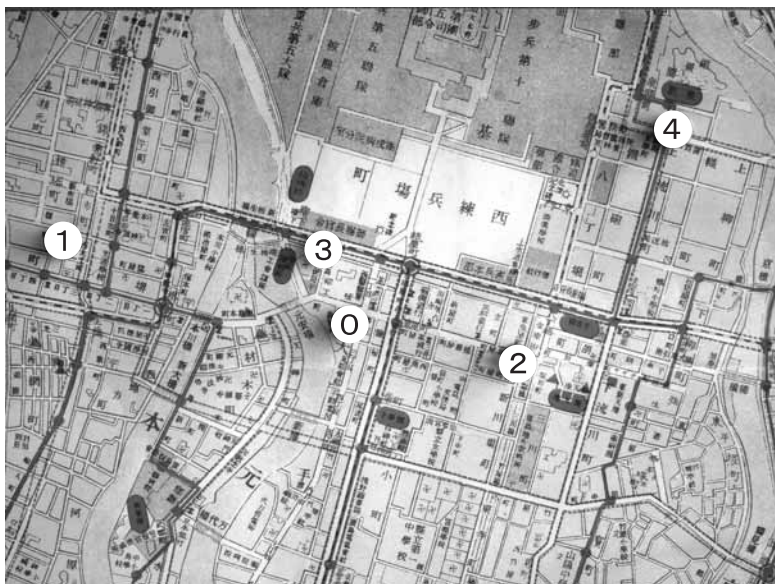


図2

旧町名を残す地図(1934年発行)に創立初期の広島女学院の位置を示す(ほぼ中央に紙屋町の交差点が見える)。

0. 最初の集会所
1. 広島女学会創設場所
2. 英和女学校に名称変更して移転した場所
3. さらに約1ヵ月後の移転先
4. 一時閉校後、再度開校した場所(現在の上幟町キャンパス)

当時広島美以教会と呼ばれたこの教会の誕生は一八八七年五月八日とされていますが、教会出発時の会員数は十四名であったといいます。実は冒頭にのべた若ランバスのレリーフ(写真1)は、同教会の創立一二〇周年を記念して作成された三体のうちの一体なのです。

なおメソジスト監督教会(Methodist Episcopal Church)教会は、その英語の頭文字をとってME教会と略されることが多かったため、それに「美以」という当て字が使われていました。したがって広島に初めて生まれたメソジスト教会も、当時は

広島美以教会と表現されており、それが後に日本メソジスト広島中央教会となり、さらに現在の日本キリスト教団・広島流川教会になりました（補足参照）。

このようにして始まったMECS日本宣教部の広島宣教でしたが、「砂本貞吉によつて開拓の緒につきし広島伝道は燎原の火の如き進歩をなし…」（中村、1936, p.11）とあるように、砂本の熱心な働きなどもあって、広島地区は最初から重要な伝道拠点となりました。実は一八八七年一月の四季会では、宣教区を神戸、広島、琵琶湖の三つの巡回区に分け、それぞれ若ランバス、老ランバス、デュークスが担当することを決めていたのですが、広島地区の高まる要望に應えるため、三月の四季会ではデュークスを琵琶湖巡回区担当から外し、広島に居住させることを決めています。また両ランバスも広島地区（当時は松山、大分を含む）をしばしば伝道に訪れていますが、とてもこの人数では各地からの要望に應えきれなかったということです。

話を元に戻して、このように小さな芽を出した広島女学院（の前身）でしたが、この学校を継続させ発展させるためには、どうしても広島で教育に専念できる宣教師が必要でした。何故なら、両ランバスの宣教範囲は後の図3に示すように瀬戸内全域でしたので、常に広島に居るわけにはいきませんでしたし、デュークスの仕事も他にあつたからでした。そこで日本宣教の責任者であつた若ランバスはMECSの本部に、広島で教育に専念できる宣教師の派遣を強く要請します。そしてその要請に應えて来広したのが女性宣教師・ゲーンズ（Nannie B. Gaines, 1860-1932）でした。二十七歳のゲーンズは一八八七年十月、若ランバス家族に同伴されて海路宇品港に

到着し、ここにその後の四十五年間にわたる広島での生涯が始まったのです。

そして若ランバスも自ら広島地区の担当者となり、デュークスに代わってそのまま広島に留まり、ゲーンスを援けて英語を教えたり、生まれたばかりの広島美以教会を育てたりして、広島中心の伝道を行いました（注5）。

若ランバスが最終的に広島を離れたのは一八八九年の春のことですが、その前年の春頃からは教育事業の中心を広島から神戸に移したようで、また八九年の秋には神戸に関西学院を創立させていることを考えれば、若ランバスは一八八八年の春頃から活動の中心を神戸に移していたと考えられます。しかし総理でありながら家族ともども日本宣教本部のある神戸を離れ、広島に家を構えた若ランバスの姿勢に、当時の広島地区の重要性が見てとれます。記録によりますと、ランバスは日本家屋に二階を増築し、そこに若ランバス一家とゲーンスが一緒に住んだようです。



写真3

創立120周年を記念して
ゲーンズ・チャペル横に設
置されたゲーンズの胸像
(寄贈：広島女学院維持会)

ゲーンズの着任によって英和女学校は軌道に乗ったかに見えました。しかし広島は安芸門徒で知られる仏教徒の強いところだったのでキリスト教に対する反撥も強く、これらの人たちが中心になって別に女学校を設立し、生徒の引き抜きを始めました。そのようなこともあつて「英和女学校」は成り立たなくなり、一八八九年四月にはゲーンスは学校を

閉じて神戸の若ランバスの家に引き揚げ、失意の日々を送ることになります。しかし内外のいくつかの理由で同年九月にはゲーンスは再び広島に戻ることになります。一つには、実は若ランバスはゲーンスが広島を引き揚げた前年に、将来に備えて上流川町（現上鞆町、図2、4参照）に学校校地を購入していたことです。第二に、当時若ランバスは、ほとんど無一文の状態であつたにも拘わらず、神戸に、後に関西学院となる男子校を設立するために獅子奮迅の働きをしているのをゲーンスは傍でつぶさに見ており、その姿に勇気づけられ、刺激を受けたからです。また次の一文も、当時の事情を理解する一助となると思います。「不幸にも二十二年（注一八八九年）四月より一時学校を閉鎖せざるを得ざりし事ありしも、ランバス総理は力を尽くしてその再開に努め、休校する事四ヶ月にして再び開校する事を得るに至つた」（中村、1986, p.180）。

このような経緯があり、また再び広島担当を任じられたゲーンスは、秋には広島に戻り学校を再開します。そして翌年には新校舎が完成しますが、これも不審火によって消失するなど苦難が続きます。しかしこれ以後のことを述べるのは本稿の目的ではありません。

ランバス宣教師父子のその後

老ランバスは、若ランバスが一八八七年秋に広島に居を移してからは、神戸の宣教本部の担当者として、また神戸地区の責任者として神戸を中心に働きました。しかし引き続いて瀬戸内全域も訪れ、後に述べるように若

ランバスと共に多くの教会を設立、あるいは設立の基礎を築いたので、「瀬戸内伝道の父」(Father of Inland Sea Mission)と呼ばれるようになりました。実は一八九二年三月二十七日、老ランバスは待望の多度津教会の献堂式に出席して体調を崩し、一ヶ月後の四月二十八日に神戸で亡くなっています。老ランバスについて書かれたものは若ランバスほど多くはありませんが、次の二つの記述は、老ランバスがどれほど多くの人から親しまれていたか、地道で慈愛に満ちた伝道者であったかを物語っていると思います。

第一は廿日市はつかいち(広島市の西隣り)での伝道風景について、ある人は次のように書き残しています。「ランバス師は昔の赤い郵便集配達車のような大八車に聖書の一杯入った箱をつけ、それを引いて私の家の前の通りなどをよく伝道に來られた。赤い車の横に十字架の書かれた白旗が立ててあったと覚えている。私たちはその人を赤ひげの異人さんが來るといつていた」。老ランバスは、質素な身なりでこのように大八車を引き、聖書を販売し、聖書について語り、瀬戸内伝道に生涯を捧げ、上記のように一八九二年四月、神戸で六十二年の生涯を閉じました。そしてそのお墓は現在も神戸の外人墓地にあります。日本での働きは六年間でした。

老ランバスの人柄が偲ばれる第二のエピソードは、中国山地の町、庄原に「ランバス」という名の売店があることに関わりがあります。庄原は尾道の北五十数キロ、広島県の東北約百キロの岡山県に近い中国山地にある町ですが、一八八〇年頃、同地の出身で福沢諭吉の教えを受けた慶応義塾出身の伊藤薫三らが中心になって庄原に文明開化を起こそうとして、一八八四年に「庄原英学校」を設立します。この学校は八年しか続きませんでした、



写真4 a

広島県庄原市・国営備北丘陵
公園デジタルセンター

同校の教師（後、校長）、中山栄之助（後、関西学院神学部^{さかのすけ}に学び、その第一回卒業生になる）が、広島に老ランバスが居るのを知って、是非伝道と英語教育の指導に庄原に来てほしいと手紙で願い出ます。そしてその要望に応えて老ランバスは一八八七年五月十六日砂本と共に同地を訪れ、非常に大きな影響を与えたのです。実は一九九五年、庄原に広大な国営備北丘陵公園が開園しますが、その建設に市から出向して関わりを持った一職員が、かつて庄原の人たちに親しまれ愛された老ランバスのことを、郷土

史に詳しい武田祐三

さん等を通して知

ります。そして何とか後世にランバスの名を残したいと考えて、庄原英学校の元校舎を模して作られた同公園のデジタルセンターの売店の名として「ランバス」の名を残すことになりました（写真4 a・b）。国光拓自という名前のその職員の方（二〇〇七年現在、庄原副市長）は、「売店の名前で失礼だったのですが」と恐縮しておら



写真4 b

写真4 a 内の売店ランバス

れましたが、老ランバスの名を何とか記憶にとどめたいという土地の人の熱い思いは十分に伝わってきました。

一方若ランバスは日本に滞在したのは約四年間で、一八九〇年十二月には離日しています。それ以後は本国伝道局で活躍し、南メソジスト監督教会の海外伝道担当の監督として、ブラジル、アフリカ、ロシアを含む、オーストラリアを除くすべての大陸でグローバルな働きをしました。そして一九二二年九月二十六日、再び東洋地域の伝道の監督の立場で日本を訪問中に横浜で亡くなり、葬儀は関西学院で行われ、遺骨は神戸の父の墓地に別れを告げて母メリーの眠る上海の外人墓地に運ばれ、そこに葬られました。これは当時本国にいた若ランバスの妻デイジーの希望でしたが、この上海の墓地は、文化大革命後の移転のために失われてしまいました。

なお写真5は、一九〇七年に若ランバスが広島を訪問したときに砂本と共に撮ったものと思われます。実は日本宣教を行っていた北米にルーツをもつ三つの派のメソジスト教会（注2および補足参照）は、一九〇七年に日本メソジスト教会に一本化されるのですが、若ランバスはMECSの代表として来日し、東京での三派合同総会に出席し、そのあと広島を訪問し、MECS宣教師会議に出席しています。これはその時の写真と思われますが、そう



写真5

若ランバスと砂本貞吉
（『日本メソジスト広島中央教会
五十年略史』より）

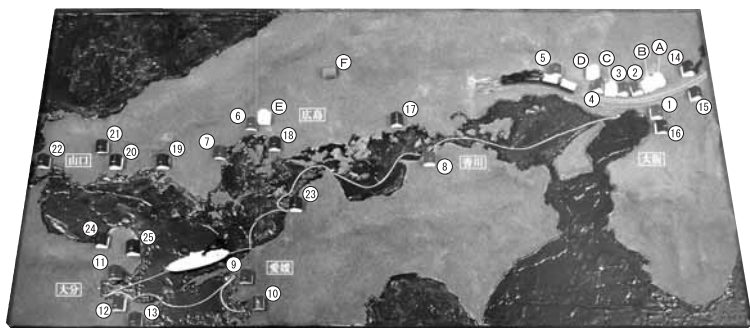


図3

若ランバスの瀬戸内伝道圏構想

(関西学院大学図書館によって作成されたカラーのジオラマを元に、本稿にあわせて番号を付け直し、白黒で再生した)

だとすると若ランバスは五十二歳、砂本は五十一歳です。

ランバス宣教師父子の瀬戸内に残した足跡

このようなランバス宣教師父子夫妻の働きの結果、西日本に数多くの教会、学校が設立されました。図3は、若ランバスの「瀬戸内伝道圏構想」に従って創設、あるいは創設の基礎が築かれた二十五の教会を示しています。図3の①～⑬は、若ランバスが日本を去る一八九〇年末までに創設された十三教会で、それらを地図上の番号と共に示しますと次のようになります。①東梅田、②御影、③神戸栄光、④兵庫松本通、⑤姫路五軒邸、⑥広島流川、⑦岩国(以上、本州)、⑧多度津、⑨八幡浜、⑩宇和島中町(以上、四国)、⑪杵築、⑫大分、⑬佐伯(以上、九州)。そしてそれ以後、ランバスの蒔いた種が実って創設された教会は⑭～⑮示した教会で、それらは、⑭京都御幸町、⑮伏見、⑯堺清水橋、⑰福山東、⑱呉平安、⑲徳山、⑳防府、㉑山口信愛、㉒下関丸山(以上、本州)、

②③松山番町（四国）、②④中津、②⑤国東くにとう（以上、九州）の十二教会です。

またランバス・ファミリーが設立に関わった学校は、E広島女学院、Cバルモア学院、B聖和大学、A関西学院、D啓明学院などですが、これらの諸学校は現在ランバス・リーグを結んで交流を行っています。末尾の付図「ランバス関係姉妹校」はこれらの関係を時間軸も取り入れて要領よくまとめています。この付図によりますと、広島女学院に一八九五年から一九二〇年まであった保姆養成科（後、保姆師範科）は、一九二一年には、老ランバス夫人・メアリーによつて創設された神戸婦人伝道学校（後、ランバス記念伝道学校）に合流し、それによつてランバス女学院が生まれ、それが現在の聖和大学へと発展した経緯もわかります。またバルモア学院は、ランバス宣教師父子が神戸に最初に開いた読書館が母体となったものですが、その男子部から関西学院が生まれ、女子部から啓明女学院が誕生する経緯も、この付図によくまとめられています。

なお若ランバスが離日した一八九〇年現在、西日本各地の宣教活動に任命されていたMECS宣教師は、男性十三名、女性五名、計十八名と、四年前の三名から大きく増えています。そして広島地区担当は、ウォータースと広島女学院担当の女性宣教師ゲーンズ、ストライダーの計三名でした（一八九〇年「年会議事録」による）。また一八九〇～九一年の任地表に挙がっている土地名、学校名を地区別に列挙しますと、【神戸地区】神戸、兵庫、住吉、姫路、加古川、関西学院、神戸女学校（Kobe Girls' School）、バルモア英学校、大阪、和歌山、【広島地区】広島、可部、廿日市、岩国、柳井、山口、広島女学校（Hiroshima Girls' School）、【松

【山地区】松山、多度津、宇和島、八幡浜、大分、杵築、佐伯となり、四年間で宣教範囲も大きく広がり、地区も細分化されていることが分かります。

すでに述べたように、若ランバスは一八八七年九月からしばらくは活動の中心を神戸から広島に移しています。着任したばかりのゲーンズを援け広島女学院の基礎を固め、生まれて間もない広島美以教会に力を入れ、要求の高まる九州、四国方面への伝道の拠点とするためだったのでしょう。そしてそのために広島多くの青年が若ランバスの影響を受け、後に関西学院に学ぶようになり、さらには同校で重要な役割を占めるようになっていきます。例えば、田中義弘（神学部第一回卒業生、中学部長）、三戸吉太郎（メソジスト日曜学校の父）、松本益吉（神学部教授、副院長）、村上博輔（博学・気骨の教育者、文学部教授）などです。またその二代目、三代目にも関西学院に縁の深い人が沢山います。なお本文中に書くのははばかられるので注記しますが、わが家とランバスとの関わりにも縁浅からぬものがあります（注6）。

このように見てきますと、今よりもはるかに交通の便が悪かったにもかかわらず、人々は精神を伝えるために、また精神を求めて遠距離をもとめせずよく動いていた姿が浮かび上がってきます。またその精神は、足元の家庭の中にあつては親から子へと伝えられている姿も見えてきます。古き良き時代の私学の姿、家庭の姿を見る思いがします。

ランバス宣教師父子の生涯を振り返って思うこと

以上、駆け足でしたがランバス宣教師父子の生涯を広島中心に振り返ってみました。以下三点にしばって思うところなどを述べたいと思います。

広島女学院とランバス宣教師父子

既に述べたように広島女学院の創立者は砂本で、ランバス宣教師は創立協力者といわれています。しかしこのことについて『広島女学院百年史』は次のように述べています。「広島での女学校の設立は、砂本が創立した学校をアメリカ南メソジスト監督教会が引きついだというのではなく、むしろ W. R. ランバスの意図した日本宣教方策の一環としての女子教育を、アメリカ南メソジスト監督教会に属する一伝道者として、砂本が広島で実現させたとみるのが実態に即した捉えかたであろう」（『広島女学院百年史』、p.8）（注7）。この記述は、「始めの事を思ふと不思議です。始めから女学校を建てるつもりではなかったが、自然にあつた事になりました」（同 p.707）という砂本自身の述懐とも矛盾しません。つまり砂本はランバスたちの方針に従って「広島女学会」の創立者の役目を果たしたのです。

しかし広島女学院では、実質上の創立者ランバスも役目上の創立者砂本も、ほとんど話題になることはありません。むしろ若ランバスが招いたゲーンズが校母と慕われ敬愛を集めています。それは何故なのでしょう。

それはゲーンズが広島女学院という限られた範囲で四十五年間の長きにわたって生涯を捧げつくしたのに対して、砂本と広島女学院との直接の関わりはゲーンズが着任するまでの僅か一年弱であったこと、また両ランバスの宣教範囲は広く瀬戸内全体に及んでいたこと、またその滞日期间も老ランバス六年、若ランバス四年と比較的短かったからでしょう。つまり広島女学院との関わりの濃密度において、砂本、ランバスはゲーンズの比ではありませんでした。しかし砂本やランバス宣教師父子なくしては、広島女学院の誕生もゲーンズの来日もなかったことは忘れてはなりません。

今述べたことを、広島女学院を中心とした図で表しますと、厚みの異なる二つの同心円になるように思います。内側のゲーンズの円は狭くしかし四十五年の厚みがあり、外側のランバスの円は広く四〇六年の厚みの円なのです。ただその外側には、境界線も無く無限の厚みをもつてすべてを取り囲んでいる神様がられる。このように大きな枠組みの中でのものを見る目が大切だと思います。

真のグローバルイズムの具現者ランバス宣教師父子

今日ほどグローバルという言葉がよく使われる時代はこれまでにはなかったと思います。しかしグローバルイズムとは何でしょうか。たしかに交通・通信手段の発達にもなつて世界が狭くなり、もはや地球上のすべての人間は地球的視野をもたなければ共存し、地球を持続させることができない時代であることは確かです。しかしランバス宣教師父子の生涯を見ると、彼らこそ普遍的

隣人愛に裹づけられた真のグローバリズムの具現者であることを強く感じます。ランバス宣教師父子にとっては肌の色や人種の違いは問題ではありませんでした。そしてその生涯は広く人類の幸せのために捧げつくされました。老ランバスの墓は神戸に、若ランバスの墓はその母の墓と共に上海に、その妻の墓はアメリカにあることがそれを物語っています。物理的な意味でのグローバル化の進行と平行して、民族・人種の対立や戦争が絶えない今日の地球（グローブ）の姿を見るときに、ランバス宣教師父子が実践した真の隣人愛に裹づけられたグローバリズムこそ、グローバリズムの原点であるように強く思います。その意味でグローバリズムは今に始まったものではありません。むしろ情報や雑音の量が今より少なく、人が純粹に生き得た昔に比べれば、世の中は退歩しているのかもしれません。

「本物」について考える　今回ランバス宣教師父子の生涯を改めて振り返ってみて、本物と偽物ということについて考えさせられました。つまりもの事をなし遂げるのに困難と抵抗があるときにこそ、本物が生まれるのではないかという感想なのです。これだけでは分かり難いでしょうから、老ランバスについて二つの例を挙げることにします。

老ランバスは二十三歳で十九歳のメリーと結婚し、二十四歳の一八五四年に夫婦で伝道のためにニューヨークから中国に旅立ちました。そのときメリーのお腹には既に若ランバスが宿っていました。船旅はアフリカの南端を通

り、インド洋を経て、上海に向かうルートでしたが、全行程は百三十五日、四ヶ月半に及びました。そして上海に着いて二ヶ月後の十一月十日には若ランバスが誕生しているのです。書けばただこれだけのことですが、身重の新妻が、当時まだ危険と隣り合わせの船による長旅を乗り越えて、まったく未知の国中国に夫についていく姿を想像してみてください。何たる強い使命感、何たる強い信仰、何たる強い意思と思いませんか。しかもこの旅は名誉のためでも金銭のためでもありません。ただ人に尽くすためだけの旅です。私はここに「これぞ本物」を感じるのです。現在は豊かで便利な時代です。何でも容易に時間をかけずにできてしまう時代です。こういう時代にあつては本物と偽物の区別がつかないのではないのでしょうか。何でも簡単にできてしまうので、もし困難と抵抗があればやり遂げるほどの強い意思のない者の行うことまでが本物顔して大道闊歩する時代のように思います。右に、「本物」は困難と抵抗があるときにこそ生まれると述べた意味が少しわかつてもらえたでしょうか。

いま一つ「本物」の例をあげて終わります。これは先に紹介した庄原の英学校で学び、後に広島県の農政に尽くしたという黒田穰翁の回顧談からのものです。引用してみましよう。「そのころ多分明治二十年ごろ・・・だったかと思うが、J. W. ランバスさんが広島に来たというので、十二・三歳や十四・五歳のわれわれ腕白小僧どもが五・六人で朝も明けそめぬころ、母親に竹皮の中に入ったおむすびと着替えを風呂敷に入れたのを斜めに肩から胸に結んでもらつて、広島県に向かつて三次―吉田の街道をどんどん歩きました。目的というのは英学校で習った英語が本当に通じるかどうか、ひとつ自分たちで試してみようということでした。よくも今から思えば大

胆に一途に歩いて行ったものです。二十五里（注 約百キロ）の途中どこだったか一泊して広島にたどり着きました。ところが人の話ではランバスさんは今は広島ではなくて、宮島に行つてそこに居られるはずというので、皆でこんどは宮島まで歩いたり船で行きました。岩惣さんという旅館だったと思いますが、とうとうそこでランバスさんに会えました。英語をしゃべつて通じた時の我々の喜びは大変なものでした。ランバスさんも非常に喜んで一人ひとり頭を撫でたり、キャンディーやバイブルを配つたり親切にしてくれました。我々はしばらく遊んで意気揚々と帰つたものです」（澄田・小寄編、2005, p.47）。ここにも英語を学ぼうとする少年の姿に私は「本物」を見ることが出来ます。腕白の中学生が、ただ自分たちの習つた英語が通じるかどうかだけを確かめるために、百キロの道をものともせず歩きつづけ、その願いを果たして意気揚々とまた百キロの道を引き揚げて行く姿はほほえましく純粹で、「本物」そのものに見えます。今の世は高卒の半数が大学に進む時代です。その学びへの意思はどれほど「本物」なのでしょうか。百キロの道を歩いてでも自分の英語力を確かめようとする情熱が私たちの学びの背後にはあるのでしょうか。

私も同じです。私は心理学者になりました。しかし心理学の学びへの情熱は、老ランバス夫人や庄原の少年たちの情熱に比べてどうだったでしょうか。このような事を考えると、今日の何でも簡単にできてしまう贅沢な世に甘えてはいかん、恵まれていることに感謝して、たとえ困難がなくても自分を鼓舞して鉄の意思でもつてもの事をやり遂げようとする努力をしなければ、ランバス宣教師父子や庄原の少年たちに申し訳ないような気がし

てならないのです。これは私のような昔人間だけが考えることなのでしょう。

ランバス父子、砂本貞吉によつて種が蒔かれ、ゲーンズによつて基礎が築かれた広島女学院が、今日の世俗の風に流され、その建学の精神を軽んずるようなことがあれば、それはもはや広島女学院とは呼ぶことができないと思います。幼稚園、中学、高等学校、大学、その全てが一致協力して、この「目に見えないもの」を大切に守り、伝承していかなければならないと思います。

補足 メソジストという教派について

本稿では広島女学院の源流であるメソジストという教派についてしばしば言及しました。しかし今日わが国ではメソジストというのは歴史的ルーツをさしているに過ぎません。実は諸教派を超えて、キリスト教はもつと超教派的であるべきだという主張は太平洋戦争前からありましたが、結局一本化への道は実現せず、皮肉なことに太平洋戦争が始まった一九四一年に、政府の力という外圧によつて、プロテスタントキリスト教諸教派は日本キリスト教団という一つの連合体にまとめられたのです。戦時体制の中で、キリスト教を統一的に把握・統制しやすいようにするためです。戦後になっていくつかの教派は教団から出てもとの教派に戻りましたが、メソジスト他いくつかは日本キリスト教団に留まりました。ですからわが国では今日ではメソジストは歴史的呼称にすぎません。さらに時代を遡ると、本稿で述べたメソジスト教会内の三つの流れ（アメリカ北部のメソジスト監督教会、

南部メソジスト監督教会とカナダメソジスト教会）は、本文中でも述べたようにすでに一九〇七年に日本メソジスト教会に一本化されていました。

それではメソジストという教派はいつどのようになって起こったのでしょうか。創始者は英国国教会（聖公会）の司祭、J. ウェスレー（John Wesley, 1703-1791）で、起源は十八世紀前半です。当時の英国は産業革命の影響で急激な産業化・都市化が進み、それによってイギリス人の生活が道徳的に乱れていました。ウェスレーはそれを嘆き、日常生活の倫理を強調し、非常に真面目な完全なキリスト者を目指す信仰覚醒運動を起こしたのです。そして敬虔で清潔で規則正しい生き方、つまり生活の方法（method）にこだわる立場に対して、人々は方法主義者、堅物、几帳面屋（methodist）というあだ名をつけ、それが正式名称になったということです。

その主張については、私はその道の専門ではないので書く資格はありません。ただ一七六〇年にウェスレーが行った「お金の使い方」という説教の中の次の言葉は重要だと思います。それはGain all you can, save all you can, and give all you can!（大いに獲得し、大いに節約し、大いに捧げなさい!）という言葉です。つまりあなたたちは神様から与えられたそれぞれの天職に精一杯励みなさい、そして大いにお金を稼ぎなさい（gain）、そして大いに節約し、貯金し（save）、それを社会のため、人類の幸せのために捧げなさい（give）という教えです。ゆめゆめgive なきgainがないうちに。立派な大学を出ながら、その結果を自分自身の私利私欲、立身出世、営利栄達のためだけに用いようとするエゴイストがいるとしますと、それはまさにgive なきgainに他なりません。

ん。このような考えは決してメソジストに限ったことではなく、ひろくプロテスタントキリスト教にある考えですが、われわれの人生、働き、学びの目的に関わる、本学で学ぶ者が忘れてはならない重要な主張だと思います（Max Weber, 1864-1920）著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）参照。

なお本稿ではたびたび「監督教会」という耳慣れない言葉も出てきましたが、これは「監督制」を採っている教会という意味の歴史的呼称です。プロテスタント教会での監督（Bishop）は、カトリックでは司教、聖公会では主教にあたりますが、「監督制」というのは、監督という身分の人がいる一種の階級制度を採っている教会の職制のことです。教派の職制には歴史的には「監督制」「長老制」「会衆制」という三つの基本形がありますが、詳しくは今橋・徳善（1996）の第六章を参考にしてください。

《参考文献》

- 石橋信義・三田征彦 (2004) ランバス物語 愛と祈りと奉仕に生きて ―関西学院の源流― 興正社
- 今橋朗・徳善義和 (1996) よくわかるキリスト教の教派 キリスト新聞社
- 関西学院大学図書館 (2004) 関西学院創立者 ウォルター・R・ランバスのたどった足跡 (ジオラマ) 関西学院大学図書館 (神田健次監修)
- 関西学院百年史編纂事業委員会 (編) (1997) 関西学院百年史 通史編Ⅰ 学校法人関西学院
- 澄田新・小寄智通 (編) (2005) 豊かないのち ランバス・ファミリーの蒔いた種 関西学院・啓明学院協議会
- 武田一雄 (祐二) (2000) しょっぱら 歴史と文学の町を歩く まちかどネットワーク庄原わくわく隊
- 橘雅康 (2007) 特別企画 ランバス・ファミリーの夢 日能研新聞、二〇〇七年十月号
- 寺田芳徳 (1987) J. W. ランバス宣教師の広島地区、特に庄原と廿日市の伝道について 資料室便り No.5 関西学院学院史資料室
- 西学院学院史資料室
- 中村金次 (編) (1936) 南美宣教五十年史 南美宣教五十年記念運動事務所
- 広島女学院百年史刊行委員会 (編) (1991) 広島女学院百年史 広島女学院 (広島女学院の年史には、この他、五十年史、七十年史、百拾年史があります)

ランバス伝委員会 (1959) 関西学院創立者ランバス傳 学校法人関西学院

山内一郎 (2003) メソジズムの源流 ―ウエスレー生誕三〇〇年を記念して― キリスト新聞社

注1 メソジスト監督教会は横浜、東京、長崎、函館に伝道を開始し、その結果、青山学院、活水学院、

鎮西学院、福岡学院、弘前学院、東奥義塾、遺愛学院が生まれることになります。一方カナダメソヂスト教会は静岡、東京、山梨に伝道を始め、東洋英和女学院、静岡英和女学院、山梨英和学院などを開設しました。

注2 東京・横浜二十九校、京阪神九校、九州四校、北海道一校、北陸一校の四十四校です（『関西学院百年史通史編一』1997, pp.26-28）。不思議に中四国には、まだキリスト教系の学校はありませんでした。

注3 資料によつては、砂本の出国は一八八〇年となっていますが、ここでは『創立者砂本貞吉先生 ―レリーフ除幕を記念して―』（1986, p.3）にならつて一八八二年にしました。同資料も、通説を否定した上での訂正であることを明記しているので根拠があることなのでしょう。

注4 当時MECSの日本宣教部 (Japan Mission) は十月から九月末までを一年度として、それを四つに区分し、十、一、四、七月初めに四季会 (Quarterly Conference) をもち、夏に一回、年会 (Annual Meeting) 及び Annual Conference に昇格) とつづつ総会を開いていました。

注5 なお一八八八～八九年には宣教師も増え、広島地区 (District) の広島巡回区 (Circuit) (広島、呉、岩国、庄原を含む) の責任者にはウォーターズ (B.W. Waters) が、また松山巡回区 (松山、宇和島、大分、杵築を含む) の責任者にはモーズレー (C.B. Moseley) が当たり、総理であると同時に広島地区全域の担当でもあった若ランバスと共に働いていました。

注6 私の祖父今田^{わか}参 (1860-1932) は岩国藩の武家の出でしたが、明治になって二十四、五年頃、老ランバスと共に日本宣教を始めたデュークス宣教師から大阪で洗礼を受け、キリスト教の伝道者になりました。数年に一度、監督の命によって任地が変わる当時のメソジスト監督教会の制度の中で祖父が関わったランバスゆかりの教会は、三田尻 (防府)、中津、大分、松山、山口、宇和島、岩国でした。そしてその長女チズは広島女学院に学び、一九〇一年 (明治三十四)、第八回卒業生として同保姆養成科を卒業し、後に牧師夫人になりました。父・恵は、祖父の宇和島時代に牧師になるべく宇和島中学から関西学院神学部に学びますが、その後東京に出て心理学を学び、母校に戻り、わが国の私学で初の心理学教室を創設し、心理学を教え、院長、理事長をつとめました。さらに牧師で

もあつた父は、亡くなる直前には関西学院教会の牧師もつとめました。私の母はランバス女学院に学士入学し、そこに教えに来ていた父と結ばれ、後に同校の同窓会長をつとめました。また関西学院大学神学部卒の義兄・北村宗次も長く神戸栄光教会の牧師をつとめました。そして当の私は、生徒・学生・教員として五十六年間関西学院に身を置き、心理学を教え、学長をつとめ、定年退職後、広島女学院からの誘い受け、広島に来て学長をつとめています。

注7

第二章では、砂本貞吉がMECS所属の伝道者というこの立場を否定し、MECの伝道者であつたという立場で、砂本と広島女学院創立の関係を詳しく論じています。

[illegible]

ランバスゆかりの諸学校の関係図
(日能研新聞 2007 年 10 月号 6 ~ 7 頁の掲載されたチャートに筆者が希望を述べ、それに基づき作成担当者・橘雅康氏が加筆・修正したものを、許可を得て掲載)

第二章

広島女学院創立者・砂本貞吉

今 田 寛

広島女学院上幟町キャンパスの西校地、白鳥通りを背にした「いこいのその」に、本学の創立者・砂本貞吉（1866-1938）のレリーフ（写真1・a・b）があります。早朝の朝日の中に美しく映える像ですが、これを知る人は多くはありません。また本学で砂本が話題になることもほとんどありません。本章では、砂本貞吉の本学の創立に果たした役割、出身地・広島を中心としたその働き、その生涯、人間像などを明らかにしたいと思います。ただ砂本について書かれたものは決して多くはありませんし、また古いことなので人びとの回想にも明らかに記憶まちがいのあり、正しい歴史認識は決して容易ではありませんでした。しかし本章ではいくつかの資料を参考にして、出来るだけ正しい理解に努めました（注1）。



写真1 a

上幟町キャンパスの西校地
にある砂本貞吉のレリーフ

年 表

まず年表によつて、砂本貞吉の生涯を大きく眺めてみましょう。

一八五六年（安政三年、誕生） 九月三十日 広島県佐伯郡已斐村で生まれる。父・権六、母・八重。父親を早くに亡くし、一時、母親の実家に預けられる。

一八七四年（明治七年、十八歳） 海軍に入隊、数年後退役する。

一八八二年（明治十五年、二十六歳） 函館から英国船の船員として乗船。船乗りになることを志す。しかし米国サンフランシスコで下船中、キリスト教に出会い、神学を学び、伝道者を目指すようになる。

一八八三年（明治十六年、二十七歳） 五月七日、オークランドの福音派メソジスト教会牧師・ギブソンから洗礼を受け、伝道者として働く。

一八八六年（明治十九年、三十歳） 六月、広島の母親をキリスト教に導くために半年の休暇を得て帰国する。広島への帰途九月、神戸でJ. W. ランバス（老ランバス）を訪問し、広島伝道を願い出る。老ランバスの来広を待つて、西大工町に私塾「広島女学会」を始め、これが広島女学院の誕生となる。



写真1 b
レリーフを囲む
「いこいのその」の一画

一八八七年（明治二十年、三十一歳） 三月、「広島英和女学校」と名を改め、砂本は校主となる。

八月、千葉の人・渡辺うめと結婚。十月、ゲインズ着任と同時に「英和女学校」の責任は、校主・岡健太とゲインズが担うことになり、その後はランバスを援け、広島地区の伝道に従事する。

一八九一年（明治二十四年、三十五歳） 四月、アメリカ・カリフォルニアに呼び戻され、ハワイ・ホノルルの日本人第一美以教会に赴任する。

一八九二年（明治二十五年、三十六歳） サンフランシスコに転任、婦人ホームを設立し、オークランドに日本人教会を設立する。

一八九四年（明治二十七年、三十八歳） 母・八重の死去にともなうて一八九四年に帰国する。その後、次の西日本の諸教会で奉仕する。長崎麹屋町メソジスト教会（一八九四）、岩国大名小路メソジスト教会（一九〇〇）、山口メソジスト教会（一九〇四）、三田尻岡村南美教会（一九〇八）、呉市三番町メソジスト教会（一九一〇）、下関市岬町メソジスト教会（一九一四）。

一九二五年（大正十四年、五十九歳） 引退。神戸市外、大石に住み、大石講義所を手伝う。

一九三〇年（昭和五年、六十四歳） 東京渋谷区に転居する。

一九三八年（昭和十三年、八十一歳） 五月七日永眠。本郷中央教会にて葬儀、郷里己斐に葬られる。

なお、メソジスト監督教会は、英語では Methodist Episcopal Church ですが、しばしばその頭文字をとっ

てMEと略されます。したがって日本語ではそれに当て字をして「美以」と表現されていました。したがってメソジスト教会は美教会、メソジスト監督教会は美以教会、それに南がつくと南美以教会となります。古い資料にはよくこの名で登場します。メソジスト教会、監督教会については第一章「補足」を参考にしてください。

砂本貞吉の生涯

このように見ますと、砂本貞吉の生涯は次の5期に分けることができます。

- ・ 第一期日本時代（一八五六～一八八二）　〇～二十六歳。誕生から日本を出国するまで。
- ・ 第二期アメリカ時代（一八八二～一八八六）　二十六～三十歳。神学を学び伝道者となる。
- ・ 第二期日本時代（一八八六～一八九二）　三十～三十五歳。帰国し「広島女学会」を創立する。
- ・ 第二期アメリカ時代（一八九一～一八九四）　三十五～三十八歳。ハワイとサンフランシスコで伝道者として働く。

- ・ 第三期日本時代（一八九四～一九三八）　三十八～八十一歳。再度帰国し、西日本の諸教会で一九二五年に引退するまで伝道者として働く。

以下、この時代区分にしたがって、砂本の生涯を簡単にたどってみましょう。

第一期日本時代（一八五六～一八八二）〇～二十六歳

砂本が外国行きを志したことについては、次女・

砂本信子^{しんこ}の『回想記―父・砂本貞吉のこと―』（以下『回想記』と略す）には次のように書かれています。「海軍のお勤めを終わった貞吉は、将来世界中を航行する大きい船に乗るため、英国に行つて勉強をする考えをもった。彼は海軍に在籍中に瀬戸内海航路の船長免許状を獲得していたので、更に大きい船で世界を旅行してみたかったという。彼は当時の大きい貨物船の英国船ベンジャミン号が函館に着くのを待つて船員として乗り込み船出した。」（『回想記』、pp.1-2）。

なお資料によつては、砂本の出国は一八八〇年となっていますが、ここでは『創立者砂本貞吉先生―レリーフ除幕を記念して―』（1986）にしたがつて一八八二年にしました。同資料は通説を否定した上での訂正ですので根拠があるのでしよつ。

第一期アメリカ時代（一八八二～一八八六）二十六～三十歳

つづいて引用しますと、「途中、米国サンフ

ランシスコに着き、荷物の積み替えて数日滞在することになった時、サンフランシスコを方々見物して歩いた。その時、あるキリスト教の伝道会に出会った。会堂の中に賛美歌の楽譜が掲げてあつたが、・・・青年がしきりと眺めるのを見て、その会堂の牧師O・ギブソン（注 Otis Gibson, -1889）師は彼を引き止めて親切に扱ってくれ、何くれとなく青年の話を聞いて、この地に留まれといわれ、ついにギブソン氏の許に捕らえられた。夫人が船長と交

渉して、下船させてもらって福音会の神学部で夜学で勉強することになった。ある時は昼間は皿洗い、時には音楽家の家庭の手伝いなど、夜学校で勉強しながら夜は福音会の宿舎に泊まってギブソン氏の御一家とは常に交流して、キリスト教の家庭の善さを深く感じたのだと。特に夫人と娘さんの親切は身にしみて忘れ得ぬ思い出であり、「家庭内の和やかな空気は、皆、女のなすべきもの、キリスト者を夫人に持つことは如何に幸せであるか、女子教育の必要性をこの時に深く感じていた。」とずっと後までもたびたび口にしていた。」（『回想記』、p.29）。

このように夜学で神学を修めた砂本は、一八八三年五月七日、ギブソン師から洗礼を受け、同師の伝道を援けるようになりました。しかし広島に残してきた母親をキリスト教に導きたい思いが抑えられなくなつて、それをギブソン師に打ち明け、半年の休暇をもらつて四年ぶりに日本に帰国します。

第二期日本時代（一八八六～一八九一）三十～三十五歳

こうして一八八六年の夏に帰国し、東京英和学校（青山学院の前身の一つ）の総理 R. S. マクレー宣教師を訪ねて自分の思いを伝えたと、神戸で伝道を始めたばかりの南メソジスト監督教会の J. W. ランバス（老ランバス、James William Lambuth）を訪ねるように紹介されます。そこで郷里への帰途、神戸に老ランバスを訪問し、自分の思いを伝え、広島への伝道を願ひ出ます。老ランバスもこの砂本の誘いを非常に喜びます。何故かといいますと、その年の七月に日本伝道を始めたばかりの南メソジスト監督教会（Methodist Episcopal Church, South 以下 MECS と略す）は、まだどの方面に宣教活動を行

展開するかを決めかねていたからです。したがってこの砂本の招きは神様からの呼びかけに違いない、これこそ聖書にある「マケドニア人の招き」（「マケドニア・コール」）だと喜び、広島を拠点に中国地方への伝道を始めることにします。実はこの時の砂本と老ランバスとの出会いが契機となつて、広島女学院が生まれ、後の若ランバス（Walter Russell Lambuth）の「瀬戸内圏伝道構想」が生まれることになりました。これらのことについては第一章に詳しく書かれています。また後にも少し触れることにします。

こうして神戸の老ランバスに別れを告げて一足早く広島に帰った砂本は、準備を整えて老ランバスの来広を待ちます。そして一八八六年十月二十五日、老ランバスはMECS日本初の受洗者・鈴木愿太を伴つて海路宇品港につき、鳥屋町野口旅館で最初の小さな集会をもちます（第一章、図2、0参照）。そこに集まったのは、老ランバス、鈴木その他に、砂本貞吉、その母、弟、叔父、従兄弟の五人であつたと言います。これから後のことは第一章を引用することにします。ただし地図は第一章の図2を参考にしてください。

「その後、ランバスと砂本は聖書研究と英語教育のための小さな私塾「広島女学会」を西大工町（現榎町、図2、1参照）に開きますが、これが広島女学院の誕生となります。さらに後、薬研堀にあつた杉江タヅの家塾と、石見屋町にあつた木原適處の塾「広島英学校」の女子部を合併して一つの女学校にし、文部省に認可された女学校として「私立広島英和女学校」が翌年二月十日に砂本を校主として正式にスタートします。そして場所も鉄砲屋町（現堀川町、三越のあたり、図2、2参照）に移り、生徒募集を開始します。しかしそこには一ヶ月しか留

まらないで、三月八日には場所を細工町西蓮寺前（現大手町一丁目、原爆ドームの南東の隣接地、図2、3参照）に移します。当時の記述によりますと「文武館と云つて二階で法律を教え、下では剣道や柔道を教えて居た建物が空いたので、それを借りて二階を女学校：とし、下を教会：とした」（『広島女学院百年史』、p.7）とあります。そしてこの教会が現在の広島流川教会となります。」

しかしこのようにして生まれた女学校を育てるためには、それに専念できる宣教師が必要でした。そこで当時MECS日本宣教の総責任者・総理の地位にあつた若ランバスは、アメリカの本部に対してその条件に叶つた宣教師の派遣を要請します。そしてその結果来日したのが女性宣教師・ゲーンズ (Nannie B. Gaines, 1860-1932) でした。一八八七年十月、ゲーンズは若ランバス一家と共に宇品港に到着し、そこにゲーンズの四十五年間にわたる広島女学院での働きが始まるのです。そして若ランバスも活動の拠点をしばらくは広島に移し、ゲーンズを援け、広島を拠点とした伝道活動に従事します。

ゲーンズを迎えた後は、次の回想にあるように、砂本は学校との直接の関係はなくなつたようです。「二十年（注一八八七年）の秋、ゲーンズさんが見えたので、それからは私は直接、あまり女学校の事には関係しませんでした。私はランバスさんと一緒に防州や伊予の宇和島、それから豊後の大分など各地に伝道に出かけることを主にし、ただ先生を紹介した位の事をしました。」（砂本貞吉（談）、1936）。

なお前後しますが、ゲーンズ着任の二ヶ月前の八月八日、砂本は渡辺うめ（梅）と結婚しています。このうめ

夫人は千葉県出身で、築地海岸女学校（青山学院の前身の一つ）と横浜の聖經女学校で学び、伝道者を志していましたので、砂本との縁談を最初は断ったようですが、「女一人で働くより夫婦で伝道した方がよい」と周囲に勧められて結婚したといえます。『回想記』によりますと、学生時代から声が大きい、面倒見のよい、太っ腹で、リーダーシップのあった人のように、宣教師の通訳も行っていたようです。後に述べるように、この夫人の内助の功が、後の



写真2

ハワイ時代（1891-92）
の砂本貞吉（35, 6歳）

市井の伝道者・砂本貞吉の人生を大いに援けることになります。砂本はこの夫人との間に五男三女を儲けます。このようにして砂本はランバスらを援け、一方うめ夫人も女学校で英語や編物を教えていたのですが、一八九一年にはアメリカに帰るようにとの命を受けました。当初半年の予定であったのが、すでに五年も経っていました。

第二期アメリカ時代（一八九一〜一八九四）三十五〜三十八歳

そして一八九一年四月、砂本夫妻と長男・

^{ただし}貞はサンフランシスコに渡り、その後、当時まだアメリカにとっては外国であったハワイに派遣され、日本人第一美以教会（現在のハリス合同メソジスト教会）の責任を持ちます。しかし本部の方針変更で、一八九三年にはハワイを引き上げ、以後はサンフランシスコを中心に伝道活動を行います。



写真3

広島女学院創立五十周年記念式典に出席した砂本貞吉夫妻。貞吉 80 歳。第一章の写真 1 に、砂本 51 歳時代と思われる若ランバースと 2 人で撮った写真が掲載されています。

第三期日本時代（一八九四〜一九三八）三十八〜八十一歳

に再び日本に帰国し、長崎麹屋町メソジスト教会で六年間働いたのちに一九〇〇年からは岩国のメソジスト教会に移ります。岩国時代（一九〇〇〜一九〇五）には広島女学院の手伝いもしたようです（『回想記』、p.12）、

ゲーンズもいろんなことを砂本に相談したとのことです（同、p.14）。それ以後も年表にあつたように山口、三田尻（現在の防府市）、呉の教会で伝道を行います。下関の教会を最後に一九二五年、後進に道を譲るために引退し神戸に移ります。その後一九二九年には上京しますが、一九三六年の広島女学院創立五十周年の記念式典には夫妻で出席します（写真3参照）。そして一九三八年（昭和十三年）、受洗記念日の五月七日に東京で亡くなりました。八十一歳でした。

MECSの日本宣教の中での砂本貞吉の位置づけ

MECSの日本宣教部の中での砂本の位置づけを見るためには、明治の時代に日本で宣教活動をおこなっていた北米にルーツをもつ三つの派のメソジスト教会について述べておかなければなりません。第一の派は、合衆国北部に本部を持つメソジスト監督教会(MEC)、二つ目は同南部に本部をもつ本学がその流れの中にあるMECS、第三はカナダメソジスト教会です(注2)。すでに第一章の冒頭でも述べたように、この中で日本宣教が一番遅れていたのがMECSでした。これらの三派は、最初は別々に活動をしていましたが、一九〇七年には三派合併が行われ、日本メソジスト教会に一本化されました。

実は砂本が最初にアメリカで出会ったギブソン師はMECの牧師でした。したがって砂本が最初に日本に帰国したときに横浜で紹介状をもらったのもMECのマコーレー宣教師でしたし、最初の日本滞在中の給料もMECから支給されていたと考えられます。また一八九一年にアメリカに呼び戻されて派遣されたハワイの教会も、MECのカリフォルニア年会が開拓した教会でしたし、砂本が最終的に日本に戻ってきて最初に働いた長崎麹屋町メソジスト教会もMEC系の教会だったのです。

なぜこのようなことにこだわるかと言いますと、MECの宣教師マコーレーはMECSの宣教師・老ランバス宛に砂本の紹介状を書いたので、その後砂本は、MECの伝道者でありながらMECSの伝道活動に協力するという、ある意味では変則的なことが起こったのです。実はMECSは毎夏、総会にあたる年会(Annual Meeting)のち

Annual Conference) を開催し、そこで各伝道者の続く一年間の任地表が発表されるのですが、砂本は形の上ではMEC所属のためだったのでしよう、そこには一切名前は出てきませんし、年会記録にある会員名簿にもその名は登場しません。しかし長崎麹屋町メソジスト教会を最後に、一九〇〇年以後は砂本は全面的にMECS系の教会で働くようになって(Hager, 1936 参照)、そこで初めて年会記録の任地表に砂本の名前が掲載されるようになります。しかしそれでも常に「補充」という言葉が添えられています。また会員名簿にも名前が載るようになるのですが、その場合も「正会員」欄ではなく、「その他の伝道者」の欄に掲載されています。これはおそらく、日本人が正規の伝道者（正会員）になるため、あるいは昇格のために受けなければならなかったテスト（学科試験と品行テスト）を、砂本は受けなかったためではないかと思われます。砂本はこのときすでに四十歳代半ばに達していましたし、伝道者としての経験と実績は十分だったので、今更という思いがあったのではなかったでしょうか。このような変則的な事情があったことによる混乱については末尾の「補足」をご覧ください。

それでは、このような形式的なことではなく、砂本のMECSの日本宣教における実質的貢献と役割はどうだったのでしょうか。次に述べる三つの理由で、砂本貞吉はMECSの日本宣教方針に決定的影響を与えた重要人物と言えると思います。第一に、砂本は一八八六年夏に神戸の地に老ランバスを初めて訪ねたとき、MECSとしてはその宣教の方面を北陸に伸ばすか、瀬戸内に伸ばすか迷っていた時だったのですが、砂本の広島への伝道要請によってMECSの「瀬戸内圏伝道構想」が生まれることになったのです。その意味で砂本の老ランバス訪問は、まさに

「そのとき歴史は動いた」というべきものであったといえるでしょう。第二に、砂本の広島での働きが著しいこともあって、MECSの日本宣教の初期には、広島地区は最重要地区になりました。実はMECSの日本宣教部は、宣教開始当初、宣教区を神戸、広島、琵琶湖の三つの巡回区に分け、それぞれ若ランバス、老ランバス、デュークスが担当することを決めていたのですが、「砂本貞吉によって開拓の緒につきし広島伝道は燎原の火の如き進歩をなし…」(中村、1936, p.11)‘、そのようなこともあって広島地区の重要性が高まり、それによって日本宣教部は方針変更をしているのです。つまり一八八七年前半にはデュークスは琵琶湖巡回区から広島に回りそこに定住し、引き続き同年秋からは、総理・若ランバス自らが広島地区の責任者となり、広島に居を構えているのです。もともと当時の広島地区は範囲が広く、その中には松山も大分も含まれていましたので、それらの土地への宣教拠点として広島が便利だったこともあるでしょう。しかし次の文章が示すように、当時のランバスたちにとって、砂本はなくてはならない日本人協力者であったことは間違いないと思われます。「砂本は三年間にわたって両ランバスやデュークスと共に絶え間なく巡回旅行をし続け、多度津、岩国、柳井、平尾、庄原、宇和島、大分、松山、姫路での伝道を緒につけるのを援けた」(Hager, 1937)。

そして砂本の第三の貢献は、広島女学院の創立者としてのことです。

このように砂本の実質的貢献は大きく、そのことは、MECSの『日本宣教五十年』(*Fifty Years in Japan*, 1937)において個別に取り上げられ紹介されている二十二人の宣教師と伝道者の中で、砂本は第八番目にヘーガーによつ

て紹介されていることにも表れています。上の引用もそこらのもので、一八八七年秋以後、砂本がアメリカに呼び戻されるまでの活動を記したものと思われれます。

広島女学院の歴史の中での砂本貞吉の位置づけ

次に広島女学院の歴史の中での砂本の位置づけについて考えてみましょう。先に見たように、砂本が広島女学院と直接関わったのはわずか一年足らずですから、その全生涯の中に占める割合は決して大きくはありません。それでは砂本にとって広島女学院は何だったのでしょうか。

広島女学院の『創立五十周年記念誌』、『創立七十周年記念誌』と『広島女学院百年史』とでは、創立者・砂本貞吉が女学院創立に果たした役割について多少理解が異なります。『創立五十周年記念誌』には次のようにあります。「当時の米国を目撃せし同氏（砂本）は、郷里広島に女子教育があまりに顧みられざるを慨嘆し、米国人 J. W. および W. R. ランバス師父子の助力を得て、女学校を西大工町に開き……」（p.3）。これは、砂本は広島に女性のための学校を作ることに強い使命感をもつて学校を始めたという、真の創立者・砂本という解釈です。しかし『広島女学院百年史』になりますと次のようになっていきます。「広島での女学校の設立は、砂本が創立した学校をアメリカ南メソジスト監督教会が引きついだということではなく、むしろ W. R. ランバスの意図した日本宣教方策の一環としての女子教育を、アメリカ南メソジスト監督教会に属する一伝道師として、砂本が広島で実現させた

とみるのが実態に即した捉えかたであろう」(p.8)とあります。すでに述べたように砂本を「南メソジスト監督教会に属する一伝道師」と位置づけることには異論がありますが、この記述は学校創立を意図したのはランバス、あるいはMECSであり、砂本は役割として創立者の任を担ったという解釈です。

たしかに先の『回想記』の中にあったように、最初のアメリカ滞在中にギブソン師の家庭を見て、家庭における女性の役割の大切さと、それゆえの女性教育の重要性を砂本は強く感じています。また一八八七年春に、広島の子三の女子校が合併して「私立広島英和女学校」へと「広島女学会」が発展するにあたって、日本人・砂本が果たした役割には大きいものがあります。「広島英和女学校」設立時の様子を述べている砂本の回顧談を引用してみましよう。「こうして学校の基礎もようやく据えられようとして来ました。西洋の進歩した教育状況を見て帰った私どもにはどうかして日本にも、殊に広島にも女子の教育機関を確立したい念願は深い。／幸いにランバスさんは各地において伝道開始に当たっては、必ず知事や有力者にも会って挨拶せられ、千田知事とも交わりが厚かった。そこで私どもは千田さんの紹介を得て、二等書記官奥江清風氏に面会し、広島に女学校を設立したい旨を申し出たところ、直ちに賛成せられ、早速学務課の人を呼んで文部省へ届出の方法を調査させると言って下さった。それならついでに、厚かましい事ではあるが、印さえ捺せばよいように県の方で書類を作っていたきたいとお願いしたところ、それも即座に承知くださり、やがて間もなく設立の認可を得ました。／その頃から「私立広島英和女学校」という歴とした校名を掲げられるようになりました。」(砂本談、1986, p.31)。

この後、砂本はこの学校の校主になっていますが、このような役所との折衝などは日本人でしか出来なかったことを思いますと、砂本の果たした役割は重要だったと思います。

しかし以下の点は、砂本が創立者としての役割を担ったとする『百年史』の解釈を支持するように思います。第一に、「初めのことを思うと不思議です。初めから女学校を建てるつもりではなかったが、自然にああいうことになりました。」(砂本談、1936, p.30)という砂本自身の述懐があることです。次の二つの述懐も、砂本の謙遜があるとはいえ、参考になります。「私は学校の創立者なんて言われるのがはなはだ心苦しい。私は種子も蒔かなかったようなものです」(砂本談、1936, p.39)。「私は英語も不十分で、ランバス父子が尽くしてくださいましたほどに、お報いすることは出来ませんでした。私がお尽くしたよりも以上に、私を愛して用いてくださった」(砂本談、1936, p.39)。第二は、一九〇七年にゲーンズが書いた学校の年報の中に、「二十年以上前にこの学校の創立を計画されたウィルソン監督やランバス博士」という記述があることです。

第三は事実の解釈に関するものです。すでに述べたように、一八八七年秋、ゲーンズ来広と同時に、英和女学校の校主は岡健太に代わり、砂本の学校との直接の関わりはなくなっています。この事実を見ると、創立後わずか一年で学校から離れる真の創立者がいるだろうかという疑問が起きます。むしろMECSの日本宣教部は、ゲーンズの着任と同時に、ゲーンズに英和女学校に専念させ、砂本にはランバスらの伝道支援に当たらせるようになったと考えるのが自然だと思います。したがって「広島女学会」、「広島英和女学校」も、MECSの宣教方策の

一環として生まれ、すでに女子教育の必要性を強く感じていた日本人・砂本貞吉に創立の任を託したと考えるのが自然だと思われます。

市井の伝道者・砂本貞吉夫妻

このように砂本は、MECSの方針に従って「広島女学会」の創立者の役目を果たし、また英和女学校の校主もつとめました。しかし上記のように創立して一年後の一八八七年秋にゲインズが来広した後は、助言者的役割は長くもちつづけたようですが、学校とは直接の関わりは持たなくなりました(注3)。そしてその後は、広い社会の中で人々にまみれた牧会生活を送りました。これは特に第三期日本時代になってからの西日本の諸教会(長崎麹屋町メソジスト教会(一八九四)、岩国大名小路メソジスト教会(一九〇〇)、山口メソジスト教会(一九〇四)三田尻岡村南美教会(一九〇八)、呉市三番町メソジスト教会(一九一〇)、下関市岬町メソジスト教会(一九一四)での働きを見ると顕著です(注4)。そして砂本の真価は、ある意味では閉ざされた学校の中よりも、あらゆる問題が渦巻く社会の中で、人々の中に溶け込み、泥まみれになつて働く姿においてこそ発揮されたと思います。つまりそちらの方が本来、神様が砂本に備えられた道であつたのではないかと思えます。そこで少し『回想記』の中から、市井の伝道者・砂本貞吉およびその妻うめの姿を見ることにしましょう。広島女学院とは直接関係はありませんが、創立者・砂本貞吉の人間像を知ることが大切だと思うからです。

『回想記』の記述からまず浮かび上がってくるのは、面倒見のよい砂本夫妻の姿です。病人がおれば助けに走り、お金のない者が転がり込めば泊めてやり、養えない子がおれば引き取り、とにかく困った人たちの面倒をよく見ました。娘・信子の回顧談から拾いあげますと、「我が家は宿無しの信者青年、いつも誰かが宿泊していた」(p.20)、「その頃の警察は、時には浮浪者を泊めてやつてくれと人を連れてきた」(p.21)などがあります。下関時代には、数十日にわたって三家族七人の居候が、八畳二間六畳一間の三部屋しかない家に転がり込んでいたようです。因みに砂本家には五男三女と一人の養女がおりました。このような中に育った娘・信子は自分の家を「よろず厄介引受所」と評しています。そして「数え切れないほど父は厄介事を我が家に持ち込んだのに、母は一度も不平や文句を言わず快く世話をし、ほとんど母が解決した」(p.37)と書いています。

第二は清廉潔白な砂本貞吉像です。「父がメソジストの信徒として特に考えたことは、クリスチャンとして普通人とは異なった生活をしよう」(p.34)ということだとあります。アルコールは一切口にせず、特にお金にはきれいな人だったようです。清潔な生活の仕方(method)を通して完全なキリスト者を目指す文字通りのメソジスト(几帳面な方法主義者、methodist)だったようです。家庭にあつては毎朝家庭礼拝を行い、それに参加しなければ子どもたちは食事でも食べさせてもらえなかったとも書かれています(p.29)。またお金に関しては、「我が家には預金通帳など見たことがなかった。神は必要なものは与えてくださる、…神は「忠実に神に仕えるものを殺し給うことではない!」と固く信じていたのだから、父が永眠した時にも、我が家には金はなかった」(p.20)とあります。

第三の砂本像は、気骨の人、信念の人という印象です。間違ったことに対しては相手が誰であろうと反対したので、大久保彦左衛門というあだ名がついていたようです(p.32)。また目の前で聖書を引き裂いて捨てる人を相手にしてもひるまず、根気強く訪問を続け、ついには信徒にしたという話もあります(pp.11-12)。

われわれの学校の創立に携わった人が、このような清廉・潔白・信念の人であつたことを誇らしく思います。メソジスト運動の創始者・J. ウェスレー(John Wesley, 1703-1791)は、馬にまたがって生涯に三十六万キロの伝道旅行をしたといわれますが、砂本もランバス宣教師に同伴して、また単独で、生涯にわたって随分方々に伝道の旅をしたようです。したがって、この面でもメソジストの伝統を引き継いだ実践の人であり、一つの学校の中に留まる以上に、この道で砂本は真価を発揮したように思います。

砂本ゆかりの二つの教会について

これまで述べてきたように、砂本は生涯にわたって随分多くの教会に関わりましたが、最後にその中の二つのことに簡単に触れて終えたいと思います。

下関丸山教会・ランバス記念会堂

ある時、砂本が老ランバスと共に船で福岡に向かう途中、関門海峡にさしかかった時に、老ランバスは、「あの山の上に十字架の尖塔高くそびえる会堂を建て、この海峡を渡る人々に心

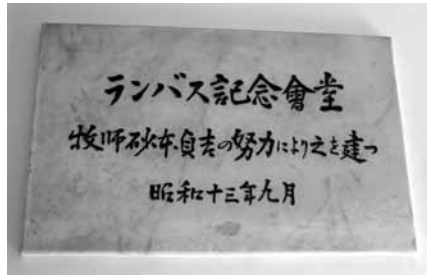


写真4 a

下関丸山教会のランバス記念会堂
のことを記したプレート（字は釘宮辰
生牧師による）

の光を掲げたいものだ」と言ったということです。砂本はこの言葉が忘れられず、一九一三年に最後の任地・下関に赴任したときにランバス記念会堂を建設することを決心します。そして砂本は自分の家族の生活に必要な最低限度の給料しか受け取らず、残りをすべて会堂建設の資金に捧げ、募金活動に全力を注ぎます。その様子は『回想記』の十九頁以後の方々に出てきます。そして一九二一年、やつと丸山町の丘の中腹に二百五十二坪の土地を購入しますが、教会堂を建てるにはまだ資金が足りません。そして夢の会堂が完成し献堂式を迎えたのは一九三八年九月十八日のことでした。砂本はその年の五月七日

に亡くなっていましたので、残念ながらわずかなことで砂本は新会堂を見ることはできませんでした。写真4 aは教会に入ったところの右の壁にかかるプレートであり、同bは現在の下関丸山教会の外観です。これらの写真は、二〇〇七年十月二十一日に、砂本の足跡を自分の目で確かめたく、下関に行き礼拝に出席したときに私が撮影したものです。当日、十一月には発刊されるという



写真4 b

下関丸山教会の外観

『下関丸山教会の百年』のゲラ刷りを樽見栄氏に見せてもらいましたが、その中に同教会への創立期協力者四人の写真の中に、当時岩国教会の牧師をしていた私の祖父・今田参^{わか}(1861-1932)の写真が砂本の写真と並んで掲載されているのを見て驚き、かつ感慨深いものがありました。私のルーツはまぎれもなく西日本であることを強く感じ、広島での現職にこれまで以上に意味を感じた訪問でした。

ハリス合同メソジスト教会

黒瀬真一郎広島女学院理事長・院長は、二〇〇七年九月、ハワイ・ホノルルに、本学の同窓生・三宅展子さんを訪問しました。三宅さんは一九七四年に本学文学部英米文学科を卒業後、アメリカに渡り、神学を学び、牧師になり、現在はホノルルのハリス合同メソジスト教会の牧師をされています。「補足」にも述べているように、この教会は一八八八年にMECカリフォルニア年会のハリスが基礎を築き、初代の牧師として美山貫一牧師が派遣された教会ですが、その二代目牧師として一八九一年八月から砂本が派遣されたのです。広島女学院の創立者が百年以上も前に責任を担った同じ教会を、その卒業生の一人が現在責任を担っていることにも感慨深いものがあります。

補足 謎解き

実は本章を書き上げるのに随分の時間を要しました。謎が多く、非常に苦勞したといってもよいでしょう。ここではその苦勞談を付記します。歴史上の事実と歴史の記述の矛盾によって生ずる謎解きですので、関心のある方はお読みください。

苦勞した原因は次の二つの記述にあります。第一は、「父の給料は二十円であつた。米国南美教会からの送金で米国から派遣された立場だったので、その頃の日本では凄い高給取りであつた」とする貞吉の次女・信子の一八八七年当時の貞吉に関する『回想記』(p.5)の記述です。第二はすでに本文にも出てきた『広島女学院百年史』の中で、広島女学会誕生当初の砂本を「南メソジスト監督教会に属する一伝道師」と位置づけていることです。本章では、以下の根拠に基づいて、砂本がMECS所属の伝道者であつたとするこれらの過去の記述を否定しています。そうしないと辻褃が合わないのです。

もし砂本がMECS所属の伝道者であつたなら、なぜMECSの年会記録に砂本の名前が出てこないのでしょうか。当時MECSでは、組織としての年会間に転会の制度があつたわけですから、アメリカの年会から日本の年会に転出して正会員になるのは容易であつたはずですし、実例も多くあります。それができなかったのは、砂本が属していたカリフォルニア年会はMECのものだったからでしょう。砂本が一八九一年にアメリカに呼び戻された後に派遣されたハワイの教会は、日本でも活躍したMECカリフォルニア年会の宣教師ハリス(M.C. Harris, 1846-1921)

によつて開拓された教会であつたことがそれを証明しています（『回想記』ではこの教会はMECSの教会となつていますがこれは事実に戻します）。また最終的に日本に帰国した後の最初の任地が、青山学院と並んでMECS系の学校である長崎の活水学院、鎮西学院の関係者が出席していたMECS系の長崎麹屋町メソジスト教会だつたことも、砂本の身分がこの時までMECS所属であつたことを物語っています。つまり過去の記述にしたがつて砂本をMECS所属の伝道者と考える限りにおいても解けない謎が、砂本がMECS所属であつたと考えることによつて一挙に解決するのです。これはヘーガーによる次の長崎以後の砂本についての記述にも整合します。「一九〇〇年八月、彼は南メソジストの宣教活動に戻り（he returned to the Southern Methodist Mission）、その時から退職するまで、彼は牧師として岩国、三田尻、呉、下関、大石で良い働きをした」（Hager, 1936, p.16）。所属はとにかく、かつてMECSの日本宣教部のために働いた砂本が、とうとう正式にMECSの仕事に参加するようになったことをreturnという言葉を用いて感慨を込めて述べているような印象を受けます。

しかしまだ謎は残ります。砂本が最初に日本に戻つて両ランバスと共にMECSの宣教に協力している間、上の砂本信子の回顧にあるように給料はアメリカから送金されていたとすると、MECSはMECSのために働いていた砂本に送金し続けていたのでしょうか。あるいは両教会間の話し合いで、『回想記』に記されているように、給料はMECS本部が負担していたのかもしれませんが。しかし砂本の身分はMECSにあつたことは否定できないと思います。

いま一つの謎は、砂本がMECSにreturnした後も、MECSの日本宣教部、三派合併後は日本メソジスト教会西部年会の正会員とは認定されず、いつまでも「その他の伝道者」であったことですが、これについての解釈はすでに本文中に述べました。実は私の祖父・今田^{わか}参（1860-1932）は、老ランバスと同じときに来日したデュークス宣教師から洗礼を受け、砂本とはほぼ同時代にMECSの伝道者になり、砂本とも山口で働きを共にしたことのある人物ですが、祖父は教師試補（Probationer）という見習い期間二年を経て、テストを経て一八九九年には正式の伝道者（教師）となりMECS日本宣教部の正会員になっています。そして正会員になってからも、一九〇三年には執事（Deacon）から長老（Elder）へとテストを受けて昇格しているのです。ところが砂本は年会記録に名前が載るようになった一九〇〇年からもずっと「補充」「補助」という身分であり、それが初めてとれたのが一九一四年の年会記録においてです。そして一九一九年には長老になっています。本文中にも述べたように、砂本は正会員になるために日本で必要なテストを受けなかったようですが、あるときから実績をもとに長老と認定されたのではないのでしょうか。それでも最後まで正会員ではなく、「その他の伝道者」であったのは、方法や形式、つまりメソッドを大切にするメソジストだったからでしょうか。

付記

なお本稿の第二校の段階で、広島流川教会の森澤一由牧師からいただいた資料 (Kogs, 1977, p.71) によつて、本補足の推理の正当性が証明されました。つまり同資料には、MECのカリフォルニア年会の会員であったサクラメントの砂本は、一八九四年に日本年会に転出したと明確に書かれています。校正をお読みいただき、貴重な情報を提供くださった森澤牧師に心からの感謝を申し上げます。

《参考文献》

- Hager, S.E. (1937) Rev. T. Sunamoto. In *Fifty years in Japan* (Fifty Anniversary Year Book of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church and Minutes of the Fiftieth Annual Meeting held at Kobe, Japan, Oct. 31-Nov. 4, 1936)
- 今石益之 (1983) 人物史シリーズ⑩ 児玉弥三郎 (1869-1944) —初代高女部長として学院の教育に貢献— 広島女学院報第七十八号 (一九八三年一月二十日発行)

Kogs, S. (Compiled) (1977) *A centennial legacy: History of the Japanese Christian missions in North America 1877-1977*. Vol. 1. Chicago, Ill.: Nobart.

小田切快三 (1975) 人物史シリーズ (一) 創立者 砂本貞吉 広島女学院報第五十八号 (一九七五年七月十五日発行)

児玉国之進 (談) (1982) 生き、学び、そして教える探求者の声 ― 児玉国之進 ― 関西学院通信クレセント、六巻一号、pp.113-119. (聞き手 米田満)

砂本信子 (1995) 回想記 ― 父・砂本貞吉のこと ― 広島女学院 (本書には出版年が記載されていませんので、編集後記の年を出版年としています)

砂本貞吉 (談) (1936) 母の救いと広島女学校の開設 ― 細工町仮校舎時代の思い出 ― 創立五十年史 pp.30-40. 広島女学院

中村金次 (編) (1936) 南美宣教五十年史 南美宣教五十年記念運動事務所

日本基督教団下関丸山教会 (編) (2007) 日本基督教団 下関丸山教会の百年 (1904-2004) 日本基督教団下関丸山教会

日本メソジスト広島中央教会五十年略史編纂員 (1936) 日本メソジスト広島中央教会五十年史 日本メソジスト広島中央教会

ハリス合同メソジスト教会百年祭記念誌編集委員会（編）（1988） 百年の歩み 一八八八年～現在 ハリス合同

メソジスト教会 ホノルル・ハワイ

広島女学院（1936）創立五拾周年記念誌 広島女学院

広島女学院（1856）創立七拾周年記念誌 広島女学院

広島女学院百年史刊行委員会（1991） 広島女学院百年史 広島女学院

広島女学院創立一〇〇周年事業行事委員会 砂本先生レリーフ委員会（編）（1986） 創立者砂本貞吉先生

—レリーフ除幕式を記念して— 広島女学院

米田満（1986） 児玉国之進先生卒寿記念 関西学院とともに 関西学院大学体育会OB倶楽部

注1 本章では、過去に書かれたものを引用する場合がありますが、句読点、仮名づかいなど、文意を変えない範囲で今日の読者が読みやすいように多少手を加えていることがあります。また、ひとつの章としてのある程度の完結性も目指したので、多少第一章との重複があります。それらの点を予めお断りしておきます。

注2 これらの三派が設立した学校については、第一章の注1をご覧ください。

注3 ただ砂本と広島女学院とのつながりは、その後も、砂本の姪・菅サワ（浅野家御用商人「蔦谷」の長

女）が、広島女学院初代の高女部長となった児玉弥三郎に嫁いだことによって（今石、1983）、さらにその息子・児玉国之進が、関西学院神学部およびアメリカの大学で学んだ後、広島女学院カレッジの英語教師になったことによつて続くことになります。児玉国之進はその後、関西学院に移り、定年を迎えるまで長く教鞭をとり、特に父親譲りのスポーツ好きで体育会学生に大変慕われました。また砂本貞吉の長男・貞（ただし国之進の大伯父で六歳年上）も青山学院、鎮西学院を経て国之進と同じ大正二年に関西学院神学部に入學し、柔道の選手としても鳴りました。なお一学年上の神学生であつた私の父・恵も、剣道の選手として砂本貞とともに活躍したとあります（米田、1986, p.61）。

注4 これらの教会の現在の名称は、いずれも正式には頭に「日本キリスト教団」がつきますが、長崎麹屋町教会、岩国教会、山口信愛教会、防府教会、呉平安教会、下関丸山教会となっています。

広島女学院を 創立した人たち

2008年2月25日 印刷
2008年2月29日 発行

著 者／今田 寛

発行者／広島市東区牛田東4丁目13番1号
学校法人 広島女学院
電話 082-228-0386

印刷者／広島市西区横川新町10番24号
サンヨーメディア印刷株式会社
電話 082-292-3488
